

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	家 崎 萌
2. 審査委員	主 査：（上越教育大学教授） 松 尾 大 介 副主査：（上越教育大学教授） 松 本 健 義 委 員：（兵庫教育大学教授） 初 田 隆 委 員：（兵庫教育大学教授） 浅 海 真 弓 委 員：（上越教育大学准教授） 伊 藤 将 和
3. 論文題目	「居場所」を構造化した造形による授業開発研究 ―日本とチェコ共和国を往還する実践を通して―
4. 審査結果の要旨	教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座 家崎 萌氏 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和4年2月5日（土） 15時00分～15時45分 場 所：ZOOMによるオンライン審査 1. 学位論文の構成と概要 ○学位論文の構成は以下のとおりである。 序章 本研究の動機と意義 第1章 本研究の目的と方法、構成 第1節 本研究の目的 第2節 本研究の方法と論文の構成 第2章 授業開発研究に向けた「居場所」の位置付けと美術教育を規定する枠組みの確認 第1節 本授業開発研究に向けた「居場所」の位置付け 第2節 本授業開発研究に向けた日本とチェコ共和国の美術教育を規定する枠組みの確認 第3章 日本とチェコ共和国における制作実践と「居場所」を構造化する造形の要素 第1節 日本での制作実践における自己の素朴なまとめ 第2節 チェコでの制作実践における自他の関わりから形成される「居場所」 第3節 「居場所」を構造化する造形の要素の抽出 第4章 「居場所」の「生きた問い」を軸にした授業開発の要点 第1節 2017年から2018年にかけて実施したチェコの小学校におけるアート授業の概要 第2節 「居場所」の「生きた問い」から展開させ始めたチェコの小学校におけるアート授業 第3節 日本とチェコ共和国の児童による交流を試みたチェコの小学校におけるアート授業

第4節	「居場所」の「生きた問い」を軸にした授業開発へ向けた要点の整理
第5章	「生きた問い」である「居場所」を構造化した造形による交流授業の開発と実践及び事例研究
第1節	日本とチェコ共和国間の交流授業の概要と題材開発の2つの柱
第2節	＜事例1＞自己のまとまりを託す造形活動の検証：日本での授業「ディーテェは旅する」
第3節	＜事例2＞他者へ応答する造形活動の検証：チェコでの授業「コドモ」と授業「コドモとディーテェの家」
第4節	＜事例3＞「他者」と＜他者＞に出会う造形活動の検証：チェコでの授業「コドモ共和国」
第5節	＜事例4＞自他の境界に着目した造形活動の検証：日本での授業「一緒に居場所」
第6節	チェコの児童への造形物の返還
第7節	一連の交流授業のまとめ
第6章	日本とチェコ共和国を往還する交流授業における児童たちの変容と「居場所」を構造化した造形による授業開発の方策とその結果
第1節	本交流授業における児童たちの変容
第2節	本授業開発の方策の結果
結語	本研究のまとめと今後の課題

○本論文の概要は以下のとおりである。

本研究は、「居場所」を「物理的な空間の所在に加え、他者との関係を通して形成され、問い直される自己の存在意義と関わる場」と捉え、①日本とチェコ共和国を往還する「居場所」を構造化した造形による交流授業が、両国の児童にどのような変容をもたらすか、②日本とチェコ共和国を往還する実践を通じた「生きた問い」である「居場所」を軸に、美術教育の授業を開発する方策、の2点を明らかにしたものである。

本研究で実施した日本とチェコ共和国間の交流授業は、両国の小学3、4年生の児童を対象とし、日本のクラス担任とチェコの教科担任のネイティブティーチャー2人と、両国を往還するプロジェクトティーチャーである筆者によるチームティーチングの体制で行われた。a/r/tographyの研究手法論が提唱する「生きた問い」とは、J. デューイの「質的思考」を基盤とし、実践に参入する「不確定な自己」から探究する問いである。本研究では、複雑な「事態」の連続である経験を対象化する働きとして「能動」と「受動」の「質的思考」を重視している。そして、制作者でもある筆者の、他者や場との関わりから浮かび上がった問いを、実践に参入しながら、両国の交流授業に構造化して授業開発、実践を行い、児童の変容を中心に記述、分析していく一連のサイクルにより授業開発研究を進めている。

第1章では、本研究の目的とa/r/tographyの手法による先行研究等を確認しながら、「生きた問い」の探求を記述するアプローチ等の方法を示し、本論文の構成を記している。

第2章では、まず、E. レルフの場所の現象学による「内側性」「外側性」を、「居場所」の造形活動をめぐる経験の「質」を捉える手がかりにしている。次いで、今日の社会や教育における「居場所」を他者との関わりから位置付けている。そして、日本とチェコの美術教育を規定する枠組みを確認し、チェコのコミュニケーションへの参画、日本の自分の見方・考え方からの広がりをおおにしている特徴を読み取っている。

第3章では、日本とチェコにおける制作実践や作品事例の記述に基づき、出来事としての身体と＜定位＞(E. レヴィナス)、「境界化」と「統合」(J. ベリー)を援用し、自己のまとまりを意識するプロセスや、内と外の「事態」を経験する境界の「質」等の考察から、「居場所」を構造化する造形の要素を抽出している。

第4章では、チェコの小学校で現地の教員と筆者で共同したこれまでの授業のうち、本授業開発の契機となった授業や、音楽をテーマにチェコと日本の交流を試みた造形活動の授業を考察している。特に、危うく繊細な「居場所」を表す筆者自身の作品を鑑賞する授業において、「生きた問い」の共有が始まった経緯について検証している。その問いを児童と共有する活動の実際から、本授業開発へ向け、教員でもある研究主体が両国の個別具体的な場に参入する必要性等の課題や、児童に場へ入り込むような内側への焦点化をもたらす「『居場所』の主人」の具現化等の要点を整理している。

第5章では、開発した授業実践における児童の変容を中心に事例を記述・分析している。題材の柱に「自己のまとまりを託す造形活動」と「他者と関わる場の造形活動」を設定し、児童の手

で形づくられた造形物を往還させ、両国で、それらの造形物を介して場に働きかける活動を展開し、児童の姿を次のように分析している。まず、日本での授業で、愛着をもって造形物を作った日本の児童は、造形物のチェコへの旅立ちを知り葛藤する。次に、チェコでの授業で、チェコの児童は、日本の児童による造形物と手紙を受け取り、色や形を工夫した造形物を友だちとしてつくる。続いて、両国の造形物のための家や国をつくる授業で、チェコの児童は矛盾する自他の境界等を省察する。最終回の授業で、チェコから両国の造形物と手紙を受け取った日本の児童は、両国の造形物に相応しい場を探りながら、形象化された関係から「他者」の応答を感受し、共感のままとりの外部で＜他者＞と対峙する等、複雑に重層化する境界を省察しつつ、各々の「居場所」の造形を見出していった。

第6章では、一連の交流授業における児童たちの変容と本授業開発の方策と結果をまとめている。活動を通じて、触覚によるメタファーの形成を通じた愛着、出来事的身體による自己のままとり、想定外の＜他者＞との対峙から内と外の境界を形成する「事態」等を経験した児童の変容について論じ、未知の＜他者＞或いは文脈を踏まえた「他者」との出会いを前提とした造形活動が児童の変容にも影響したことを示している。本授業開発研究では、不可逆的に展開する造形活動の場に参入し、自他の関係等を境界の視座から精査することで、内外の矛盾を含む複雑な「事態」との対峙とその省察に至る児童の実際に迫り、その様相を明らかにしている。

最後に、「外部参照性」が児童たちの自他の関係に「緊張感と生動性」（金子一夫）をもたらし、複雑な「事態」を「統合」する「居場所」をめぐる造形活動とその省察に、今日の教育で考慮すべき「生の悲劇性（複雑性）」（田中智志）の理解が織り込まれ得る意義を示している。そして、「生きた問い」を軸にした授業開発を、多様な教育の枠組みで学ぶ他者間をつなぐ教育実践学に資する方策としている。

2. 審査経過

（1）独創性

本研究では、自他の関係や自己の存在意義に着目し、「居場所」を構造化した造形による授業を展開するにあたり、自他の境界という視座を設定している。その視座から、造形物という対象だけでなく、造形活動における、自己と他者の関係性を読み取ることを試み、日本とチェコ共和国間で交流する児童の姿を詳細に記述し、「私」にとって理解し難い＜他者＞や矛盾も重層化されていく境界を分析している。今日の複雑化した社会において、学校教育の共同的な学びの場を成り立たせるための基盤となる、相互関係の承認や冗長性を形成していく実際の様相を明らかにした研究方法の視座に意義と独創性が認められる。

（2）発展性

日本とチェコ共和国という言語や文化的社会的背景を異にする両国で実施した授業では、a/r/tographyの研究法論が提唱する「生きた問い」を軸に「質的思考」を重視して開発している。そして、各学校のローカルな設定も考慮しつつ、互いをつなぐ造形活動の主題や身体で働きかけるメディアの果たす役割を明らかにしている。他者や場をめぐる複雑な「事態」の連続に研究者が参入する授業開発において、異質な文化間の交流を、美術固有の「質的思考」でつなぐことで、多様な教育の枠組みや、国を超えて共に学ぶ展望を本研究は示している。

（3）学校教育の実践への貢献

本研究では、児童たちにとって、自国の教育課程等で扱われない交流する国における美術教育の特徴を、互いの授業に組み込んでいる。それらの特徴に応じた自己と他者の関わりを造形活動に展開し、外部の他者とのインタラクティブな経験から、日常のクラスにおける自他の関係にも「緊張感と生動性」をもたらす授業を実現している。本授業開発の方策は、国際的な社会への広がりを見据えると同時に、造形活動の根源的な教科内容を深める美術教育の実践を教育現場に提示するものである。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 家崎 萌氏 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。